

「グアムとの交流と感謝」

湯浅 洋



今回のグアム派遣の引率者としての話が入ってきたのが、4月から5月だったと思います。「英語の教師でもない自分がなぜ?」「そんな大役を務められるのだろうか?」という思いを持ちながらも、自分に声をかけてくれ、自分を必要としてくれている方への感謝の気持ちから、この引率の話を承諾したのが今回のグアム派遣の始まりでした。グアム派遣に向けた活動は11月から本格的にスタートしました。派遣説明会、派遣生の選考、6回のオリエンテーション、壮行会、市長表敬訪問が行われ、あっという間の半年だったように思います。初めて会う人たちとの活動で緊張を隠せない派遣生が多い中でしたが、少しずつでも仲間意識が高まり、それぞれの個性が発揮された素晴らしい仲間関係を築くことができたように思います。6回のオリエンテーションでは、リーダーを中心としたパフォーマンスの練習と英会話の練習が真剣に行われました。リーダーが作成した企画に基づいてみんなでアイデアを出しながら練習した「二人羽織」と「書道・桜」も日本の文化として少しはわかってもらえたと思います。また、派遣直前に一般の通行人の目がある中で練習した「長縄跳び」は、多くのグアムの子どもたちに喜んでもらえました。この「長縄跳び」はグアム生が来柏の際に酒井根中で行う交流の1つにもなっているので、きっと盛り上がると思います。

さて、自分にとっての初めての海外でもあるグアム、特にホームステイには不安がありました。言葉と生活習慣の違いが大きい中で、6日間をどう過ごすのか。また、この事業の目的である交流を十分に果たすことができるのか。出発前にホームステイ先が変更になり、どのような方で、どのような家族構成であるのか、ほとんどあちらの情報がわからない状況もありました。自分を受け入れてくれたのは21歳のBryan。今では、Bryanに対する感謝の気持ちは言葉で表せないほどです。十分に英語が通じない自分に対して、この6日間、グアムのことや家族のことなどたくさんのお話を話してくれました。また、細かいことにまで配慮をしてもらったBryanの優しさは決して忘れないと思います。自分が社会科の教師で歴史を教えているということで、特に歴史的な場所を多く案内してくれました。太平洋戦争中の日本とグアムとの関係を考えると、現在の柏とグアムの交流関係は今後もさらに大切にしていきたいと感じました。3日目の夜には、Bryanが教えているハイスクールのフェスティバルに連れて行ってもらいました。日本の学校でも行われているいわゆる学年(学級)対抗の音楽祭(合唱祭)です。歌とダンスで会場はものすごく盛り上がり、グアムの高校生のパワーを感じました。そこでは、日本語を教えている日本人の方の近くに席を設けてくれ、それもBryanの配慮だったように思います。帰国する前日には、Bryanの家族(両親、姉夫婦)とともに食事をしました。家族との食事は初めてでしたが、とても優しい家族でした。また、両親と姉夫婦からたくさんのお土産をいただきました。最終日の午前中は、Bryanのお父さんがいろいろと連れて行ってくれました。最後にはお父さんの職場にも案内され、そこには多くの監視カメラがあり、グアムを守る大切な仕事をしているようでした。この6日間を通して、最初は知っている英単語しか使えなかった自分が、中学生の時に学習した内容を思い出しながらも少しずつですが文章でも会話ができるようになってきたことが不思議でした。中学生で勉強した英語がこんなことで役に立つなんて思ってもいませんでした。派遣生の中学生も勉強を始めたばかりの英語ですが、よくグアムの方と交流していたと思います。このグアム派遣は、これから国際社会に生きる中学生にはきっと貴重な経験になったと思います。また、社会科の教師である自分にとっても、「身近な地域の学習」として姉妹都市の指導を行っています。今回の経験からさらに国際交流の意義を伝えられると思います。言葉や生活習慣の違いはあっても互いに理解し合おうとする気持ちがこれからの国際社会にとって大切であると実感しました。